

ヨハネによる福音書 6 章 1～15 節

「パンと^{さかな}魚の奇跡」「5,000 人の給食」

- ・ 今月の聖書は、「パンと魚の奇跡」とも「5,000 人の給食」とも呼ばれる箇所です。
- ・ 奇跡物語としては、「マタイ」「マルコ」「ルカ」「ヨハネ」の 4 つの福音書がそろって記すただ一つのものです（マタイによる福音書 14 章 13～21 節、マルコによる福音書 6 章 30～44 節、ルカによる福音書 9 章 10～17 節、ヨハネによる福音書 6 章 1～15 節）。そうしたところからも、この出来事の重要性が^{うかが} 窺われます。
- ・ 他の福音書をあわせ読むと、時刻は夕方近くと考えられます。

「イエスはガリラヤ湖、すなわちティベリアス湖の向こう岸に渡られた」（1）

・ 「ガリラヤ湖」は右の地図に見るとおり、パレスティナ北部のガリラヤ地方に位置しています。イエス・キリストの故郷の湖です。

・ 「ティベリアス湖」というのはガリラヤ湖の又の名で、湖の西のほとりにある「ティベリアス」という町（右の地図参照）の名から来ています。

＊ 「ティベリアス」は、ガリラヤ地方の王（ヘロデ・アンティパス）が当時ユダヤを治めていたローマ帝国の皇帝ティベリウスに捧げて造った町です。そんな政治的意味合いから、公式の名としては「ティベリアス湖」のほうが用いられていたのかもしれませんが（?）。



（日本聖書協会『聖書 新共同訳』より）

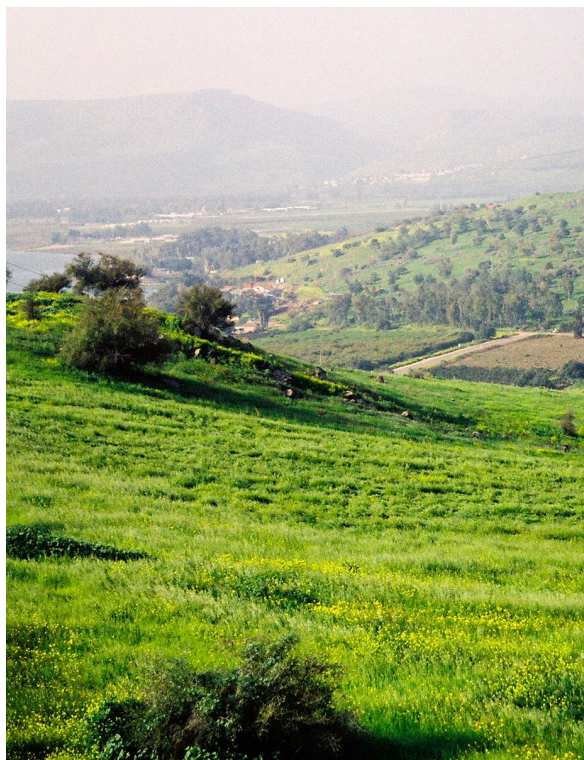
イエス：「この人たちに食べさせるには、どこでパンを買えばよいだろうか」(5)

フィリポ：「めいめいが少しずつ食べるためにも、
二百デナリオン分のパンでは足りないでしょう」(7)

- ・「フィリポ」はガリラヤ湖畔の町ベトサイダの出身で(1章44節。前頁の地図を参照)、一帯の地理や市場に通じていました。主イエスがフィリポにパンの入手先を尋ねたのはこのためと思われます。
- ・「二百デナリオン」(7)は、当時の一般的水準で約8カ月分の賃金に相当します。

*当時の一日の平均賃金が1デナリオンでした。とすれば、200デナリオンは200日分の賃金という計算になります。週6日働いたとして(安息日は働かないので)、約33週分の賃金に相当。すなわち、約8カ月分の賃金になります。

- ・フィリポの返答の裏には、どんな心持が隠されていたでしょうか。



ガリラヤ湖畔の丘／パンと魚

アンデレ：「ここに大麦のパン五つと魚二匹とを持っている少年がいます。

けれども、こんなに大勢の人では、何の役にも立たないでしょう」(9)

- ・ここで言う「パン」というのは、ビスケットやスコーンのようなものでした。
- 「魚」とは、鱒ほどの小さな魚を保存のために塩漬けにしたものです。
- それらは少年のお弁当だったのでしょうか。
- ・ここで目を惹くのは、それが「大麦のパン」だということです。なぜなら、パンは普通小麦粉でつくるもので、大麦のそれは貧しい者たちのパンだったからです。
- だとすると、ここでの「少年」は貧しい家の者だったのかもしれませんが。

近年はそれにとどまらず、この少年は「少年奴隷」だったする見方が有力になっています。

・パンと魚を差し出す少年がいます。おそらくは奴隷だったその少年から、貧しい食べ物を受け取れるイエス・キリストがいます。

・「けれども・・・」と、アンデレは言葉を加えています。それは、アンデレのどんな思いを示しているでしょうか。

・しかし、アンデレはとにもかくにも、少年をイエス・キリストに取り次ぎました。

・これらの全体から、私たちはいったい、どんな生き方を教えられるのでしょうか。信仰の何を教えられるのでしょうか。

「イエスはパンを取り、感謝の祈りを唱えてから、座っている人々に分け与えられた。

また、魚も同じようにして、欲しいだけ分け与えられた」(11)

「人々が満腹した」(12)

「その数はおおよそ五千人であった」(10)

・「五千人」(10)というのは女性や子供の数を入れない、男性だけの数です。当時の男性中心のユダヤ社会の習わしに基づくもので、全体ではこれよりはるかに多い計算になります。

「大勢の群衆が後を追った。イエスが病人たちになさったしるしを見たからである」(2)

「人々はイエスのなさったしるしを見て、

『まさにこの人こそ、世に来られる預言者である』と言った」(14)

「イエスは、人々が来て、自分を王にするために連れて行こうとしているのを知り、

ひとりでまた山に退かれた」(15)

・ここで言われている「しるし」(2、14)とは、いわゆる奇跡的な業を意味しています。人々は先には病人たちになされた癒やしの奇跡を見(2)、今また、5つのパンと2匹の魚の奇跡を目の当たりにしました(14)。

・「世に来られる預言者」(14)とは、モーセのような預言者を指しています(申命記18章15節を参照)。

・人々が「自分を王にするために」(15)連れていこうとしているといいます。人々はどんな期待からそうしようとしているのでしょうか。それは、「この人なら、自分たちの願いどおりに我々をローマ帝国の圧制から解放し、富んだ栄光の国を再興してくれる」との期待からでした。

・「(イエスは・・・山に)退かれた」(15)とありますが、書き写しの写本によっては「逃げた」となっているものもあります。イエス・キリストはなぜ、人々の前から逃れられたのでしょうか。

・人々の期待とイエス・キリストの思いは同じものだったのでしょうか、それとも違っていたのでしょうか。もし違っていたとしたら、そこにはどんな食い違いが見られるのでしょうか。

そこから、どんな教訓を学ぶのでしょうか。また、信仰のどんな事柄を学ぶのでしょうか。

「ユダヤ人の祭りである過越祭が近づいていた」(4)

・「ヨハネによる福音書」では全体で 3 度、「過越祭」について触れられています。そして、それらのどの場合も、同じ一つのテーマへと話が進められています。

①第一は「2 章 13 節」で、いわゆる「宮清め」と呼ばれる出来事と関連して触れられているところです。イエス・キリストの「十字架の死と復活」の言葉へと進んでいきます(2:19)。

②第二は今月の箇所「6 章 4 節」で、湖上の出来事(6:16~21)を挟んで、イエス・キリストの「死と復活」の問答へと進みます(6:22~59)。

③そして第三は「19 章 14 節」で、ローマ総督ピラトによる主イエスの裁判と関連して触れられ、ついにはイエス・キリストの「十字架刑」(19:16~30)に進むというぐあいです。

これらから分かるのは、「ヨハネによる福音書」が「過越祭」に触れるとき、それはイエス・キリストの「死と復活」について語るときにほかならないということです。

・こうしたことから考えると、イエス・キリストが人々に分け与えられた「5 つのパンと 2 匹の魚」とは実のところ、いったい何を表わしているのでしょうか。単なる食べ物としてのパンと魚にすぎないのか。それとも、それらを超えて、それら以上の何かなのか。それはいったい、何なのでしょう。そして、そこにどんな意味があるのでしょうか。

*これらについて考えるヒントとして、また少し面倒ですが良い頭の体操として、6 章の 34~59 節をあわせてお読みになるとよいでしょう。今月の出来事を受けて展開される、人々と主イエスのやり取りです。

そこではおもしろいことに、「5 つのパンと 2 匹の魚」を頂いた人たちが今度は、「命のパン」であるイエス・キリストを受け取る者と受け取らない者へと分かれ、その「肉」を食べる者と食べない者、その「血」を飲む者と飲まない者へと分かれていきます。なんとも興味深いことではないでしょうか。5 つのパンと 2 匹の魚は、全員がそれらにあずかりました。なのに、その同じ人たちが命のパンや肉や血(=イエス・キリスト)を受け取る段になると、今度はそれをする人とならない人へと分かれていくというのです。これはいったい、どういうことなのでしょう。そして、そこにどんな真理が示されているのでしょうか。

「少しも無駄にならないように、残ったパンの屑を集めなさい」(12)

「集めると・・・残ったパンの屑で、十二の籠がいっぱいになった」(13)

・「十二の籠」(13)ですから、12 人の弟子それぞれに一つずつ、籠があることになります。

・その 12 の籠が「いっぱいになった」(13)といます。パンの屑でそうなったわけですが、福音書をまとめた人(たち)はただそれだけのことを伝えたかったのでしょうか。それとも、単なる「物」としてのパン屑を超えて、そこに何らかの信仰的意味合いを込めたのでしょうか。だとしたら、そこに込められた信仰のメッセージとははたしてどんなものなのでしょう。

・イエス・キリストは、「少しも無駄にならないように」(12)と指示されました。いっぱいになった重い籠を手にした弟子たちは主イエスのこの指示を思い返して、何を感じたのでしょうか。とりわけ、

6 節には「こう言ったのはフィリポを試みるためであって」と記されています。その当のフィリポは
いったい何を思い、そこで何を学び取ったのでしょうか。

・先に待つ日々を生きるうえで、ここからどんな教えを学び取るのでしょうか。

信仰の生活を生きるうえで、どんなメッセージを聴き取るのでしょうか。